

通し番号	5083
------	------

分類番号	R03-25-13-01
------	--------------

キャベツ根こぶ病を管理するための神奈川県版ヘソディムマニュアルを作成しました	
[要約] ほ場の健康診断に基づく土壌病害管理法（ヘソディム）として、キャベツ根こぶ病を管理するための神奈川県版ヘソディムマニュアルを作成しました。これにより、夏まきキャベツのほ場ごとに発病ポテンシャルを診断・評価し、対策技術を提示できます。	
神奈川県農業技術センター・生産環境部	連絡先 0463-58-0333

#### [背景・ねらい]

土壌伝染性病害は、防除が難しく時に経済的に大きな被害を与えるため、生産現場ではその対策が求められている。一方で、過剰な対策は生産コストを増大させる。そこで、ほ場ごとに適切な予防的対策が行えるようにするため、キャベツ根こぶ病を対象に神奈川県版ヘソディムマニュアルを作成する。

#### [成果の内容・特徴]

- 1 2017年～2020年までに収集したデータより、横浜・藤沢地域の夏まきキャベツ慣行品種である‘しずはま1号’と根こぶ病抵抗性品種を含むその他品種の栽培ほ場では、発病傾向に大きな差が認められたため、神奈川県版ヘソディムマニュアルは‘しずはま1号’栽培ほ場を対象とする（データ省略）。
- 2 5年間176区（‘しずはま1号’栽培ほ場）の調査結果より作成した神奈川県版ヘソディムマニュアル（抜粋）（図1）を、上記調査区を用いて検証すると、発病ポテンシャル（発病しやすさ）レベルの評価結果に応じた対策技術が妥当であった区は全体の88%となる（データ省略）。
- 3 ‘しずはま1号’の調査結果において、休眠孢子密度にかかわらず矯正前の土壌pHが6.9以上の条件では、発病度は10未満である（図2）。
- 4 横浜・藤沢地域に適した耐病性・抵抗性品種は、横浜地域では‘新藍’、藤沢地域では‘YCRげっこう’である（データ省略）。

#### [成果の活用面・留意点]

- 1 土壌pHが目標値まで上昇したか、施用後継続的に計測して確認する。土壌pH矯正に転炉スラグを用いる場合、土壌pHの上昇が他資材よりも緩やかであることに注意する。また土壌pHを矯正した当年は、発病度が高くなる可能性がある。
- 2 診断に用いる土壌は、ほ場の中で発病の多い場所、多いと予想される場所（ほ場の中で水がたまりやすい部分、周辺より低くなっている場所等）から採取する。
- 3 今回調査したほ場の土壌は全て黒ボク土であり、その他の土壌については適用できない可能性がある。

[ 具体的データ ]

【診断項目とレベルごとの点数】

診断項目	レベル 1	点数	レベル 2	点数	レベル 3	点数
1 前作発病程度	発病なし	0	発病株率 40%未満	2	発病株率 40%以上	4
2 セルトレイ検定	発病なし	0	発病あり	4		
3 矯正前土壌 pH	pH7.1 以上	-5	pH6.6~7.0	0	pH6.5 以下	1
4 周辺ほ場の発病	発病なし	0	自家他ほ場か 隣のほ場で発病あり	2		

【総合評価基準】

各診断項目の 合計点数	0 点以下	発病ポテンシャルレベル 1
	1~3 点	レベル 2
	4~10 点	レベル 3
	11 点	'しずはま 1 号'作付け中止

【対策技術リスト】

技術項目	発病ポテンシャルレベル			
	1	2	3	'しずはま 1 号'作付け中止
土壌 pH 調整 (pH7.1 以上)	◎(○) <sup>z</sup>	◎	◎	◎
アミスルブロム水和剤セルトレイかん注 またはフルアジナム粉剤ほ場全面処理		◎	◎	◎
農薬のほ場全面処理			◎	◎
抵抗性品種の導入			○	◎
ほ場衛生	◎	◎	◎	◎
明きよ・暗きよ・耕盤破砕	◎	◎	◎	◎
おとり植物	○	○	○	○
輪作	○	○	○	○

z: ◎行う対策、○可能なら行う対策、( ) 多品目栽培の場合

図 1 作成した神奈川県版ヘソディムマニュアル (抜粋)

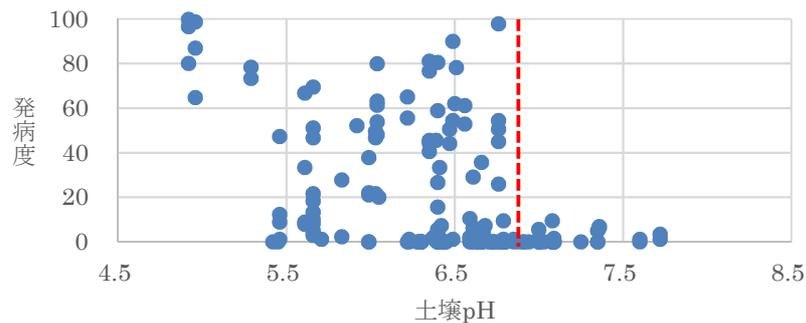


図 2 矯正前土壌pHと発病度の関係

- [ 資料名 ] 平成29年度～令和3年度試験研究成績書  
 [ 研究課題名 ] キャベツ根こぶ病に対するヘソディムの開発  
 [ 研究期間 ] 2017(平成29)年度～2021(令和3)年度  
 [ 研究者担当名 ] 島田涼子、岡本昌広、折原紀子、上山紀代美、山崎聡、田中暢、井上弦、竹本稔、原康明、西野翔  
 [ 協力・分担関係 ] 農研機構、三浦半島地区事務所普及指導課他